

# 私のすすめるこの一冊 ～高校生の声～

## 入選者 10 名のおすすめの本

宮崎県立図書館

県立図書館では、県民の誰もが生涯にわたって読書に親しむ「日本一の読書県」づくりの関連企画として、県内の高校生からおすすめの一冊を広く募集しました。その結果、25校・565名もの高校生から応募が寄せられ、選考の上、入選者10名を決定しました。

ここに、入選者がすすめる本及びすすめる理由を紹介します。高校生の熱い思いに触れて、おすすめの本を手にとってみてはいかがでしょうか。

### 重松清著 『十字架』

くろぎしの  
延岡高等学校2年 黒木 寧乃 さん

私がこの本をすすめる理由は、読んだ時にとっても大きな衝撃を受けたからです。“いじめ”という、教室の中で生きている私たち学生にとって遠くにあるようで身近な題材。いじめに関する書籍であれば数多く目にしてきたつもりでしたが、ここまで心がギュッとなる経験はありませんでした。傍観者でありながら遺書で“親友”と称され、自殺した同級生の思いが掴めないまま、のこされた家族と何年にも渡り関わり続ける主人公とその周りの矛盾と苦しみに、泣きたいような気持ちで1枚1枚ページをめくりました。「いじめはいけない」という大人の言葉よりも、ノンフィクションの本よりもまっすぐに自分の心に届き、そして残りました。直感的に、「いじめによる死」というものへの理解ができたと思いました。今、狭い世界で必死に生きる中高生に読んで欲しい作品です。

### さだまさし著 『風に立つライオン』

ひじおか ゆきこ  
宮崎南高等学校1年 肱岡 由杏子 さん

『風に立つライオン』を読み終え、始めに思ったことは、自分の生きてきた世界はこんなにも狭かったのかという驚きとこれから自分の知らない世界へと進んでいく楽しみな気持ちです。それくらいこの本は読んでいて自分の今までの考えを打ち砕かれました。このお話はアフリカの戦傷病院で働く日本人医師が主人公です。彼は医師として人間としてとても高い志をもっており、愛にあふれ、誰からも尊敬される人です。彼と出会う多くの人たちも、彼の優しさや心の広さに影響を受けます。病院で出会った少年兵もその一人です。少年は彼と強い絆で結ばれ、彼のような医者になりたいという夢をもちます。彼の志が国境を越え受け継がれていくのです。アフリカの医療の現状や治安の状態の悪さを知り、それを通して命の重さや助けることの大変さ、本当の医療というものを肌で感じる事ができた気がしました。新しい世界が広がる一冊です。

## 佐野徹夜著『君は月夜に光り輝く』

さわだ わかな

五ヶ瀬中等教育学校 4年 澤田 若奈 さん

私が今回薦める本は『君は月夜に光り輝く』です。この本は月光に照らされると体が光り、死期が近づくとその輝きが増す発光病という病気を患っている少女と主人公の話です。少女が死ぬまでにしたかったことを主人公がかわりに行い、その体験を少女に話すという実に奇妙な関係で話が展開していきます。この本で私が特におすすめしたいシーンは、クライマックスにかけてのストーリーです。いよいよ少女に死期が近づいた時、主人公のある行動で死を受け入れていた彼女に生きていたいという願いを抱かせてしまうところからクライマックスに突入します。急激に感動シーンが登場するわけではなく、じわり、じわりと押し寄せてくるラストで涙があふれること間違いなしです。ちなみに私は、30分泣き続けました。今、日常に退屈している人、何でもいから涙を流したい人、キュンキュンしたい人はぜひ、この本を読んでみてください。きっと最高の一冊になるでしょう。

## 井上美由紀著『生きてます、15歳。』

はしぐち ゆか

延岡しろやま支援学校高等部 1年 橋口 侑果 さん

私は、この本に出会い生き方や考え方を変えることができました。

この本は、500グラムで生まれた少女の物語です。少女は、全盲で生まれ父親がおらず母親一人に育てられました。苦勞もたくさんありましたが親子の絆と愛を深く感じることができました。そして、娘のことを一生懸命考える母の姿と自分らしく生きる少女の姿に感動しました。

また、私も障がいをもっていて重なる部分がいくつかありました。それは、いつも両親は私のことを考えてくれたり、みんなと同じような経験をさせてくれることです。そして、私もこの本の少女のように、自分らしい生き方を見つけるため家から離れた場所ですべてを送っています。苦しいときや寂しいときもありますが良い経験となっています。

私はこの本に出会い、障がいがあっても少女のように自分らしく生きていこうと思うようになりました。

## verb制作『遺書－5人の若者が残した最期の言葉』

さかのした はるか

高城高等学校 1年 坂之下 遥 さん

私がこの本に出会ったのは学校に行きたくないと思っている時期でした。学校の先生に「これを読んでみる」と言われたからです。

5人の若者のいじめの真実や葛藤、自殺に向けての心構え、生きることの大切さ、前向きに生きる遺族の言葉を完全ノンフィクションで伝えた本でした。

誤解のある言葉は、人の心情を深く傷つけることになる。その場の言葉や会話で楽しくても考えて行動しなければ思わぬところでいじめに繋がるということを考えさせられる本になっていました。

私がこの本を読んで得たものは、なにげない一言が受け取る人の心情や状況でこれほど重たく、悲しい言葉になってしまうということ、人の苦しみやつらさ、すべてを私が理解したとは思わない。けれどその一部を感じることもできたと思う。この本があったから私は、人を第一に考えることの大切さに気づきました。

## 椰月美智子著『しずかな日々』

さなだ たくみ

宮崎大宮高等学校3年 真田 拓弥 さん

図書館にてこの文章を書いているが、ここにはたくさんのお受験用の本をめくる小学生がいる。この話のえだいちと正反対だ。

えだいちが小学5年生の夏休みに初めて空き地で野球したり、友達とプールに行ったり濃密な経験をする。しずかな日々と淡々と語られるありきたりな夏の日々が、11才の目に見える世界を、母親と二人暮らしの部屋を越え、どんどん広げていく。図書館にいる彼らはぬか漬けの美味しさを知っているのだろうか、どろどろになって外で野球をする楽しさを知っているのだろうか。

高校生になった今、私が目に見える世界を広げようとしても難しい。まず、感動することが難しい。だからこそ、彼らには今しかできない「小学生の夏休み」を体験してほしいのだ。

かく言う私も中学受験を経験した。また、この本を読んだ理由も受験国語によく出るからである。受験の為に読む本が小学生の夏休みを楽しんだという内容の本とは何という皮肉だろうか。

## 喜多川泰著『「また、必ず会おう」と誰もが言った。』

たなか あいみ

明星視覚支援学校高等部2年 田中 愛美 さん

私がすすめる一冊は喜多川泰さんが書いた『「また、必ず会おう」と誰もが言った。』という本です。この本は17歳の男の子がディズニーランドに行ったことがあると友達に嘘をつき、嘘を隠すために実際にディズニーランドで写真をとったまでは良かったけど、飛行機に乗り遅れて帰れなくなってしまい色々な人と出会い助けられながら家に帰るという旅物語です。

私がこの本を読んで感動したことは、色々な経験をした登場人物達が、主人公にそれぞれ違う形で人生の厳しさや嘘をつくるとどうなるかなどを語っている所です。また、主人公が旅をしていくうちに自分のことを見つめ直しながら成長していく姿にも感動しました。

私は、同年代の主人公の物語を読むことが多いのですが、その中でもこの本は、会話のテンポも良く、登場人物が変わるごとに一まとまりで書かれていてとても読みやすかったです。主人公も17歳と年が近いので自分と置き換えて考えながら読むことができました。

## 佐渡裕著『僕が大人になったら』

きざき せな

都城西高等学校2年 木崎 晟那 さん

この本は日本人指揮者である佐渡裕さんが世界最高峰のオーケストラの指揮台に立つまでを書いたエッセイである。佐渡さんに興味を持ち何冊か読んだ中の一冊だが、特に印象に残った言葉が2つあった。1つは、「大事な才能とは好奇心、探究心、勇気だ」ということ。佐渡さんは、子どもの頃からベルリンフィルの指揮台に立ちたいという夢を追い続け、50歳で叶えた。私にはこの時間が長く感じ、それほどまでしても夢を実現させた行動力に心を打たれた。もう1つは、「自分の考えを押しつけず、相手の意見を尊重しながら作り上げていく」という指導法。私が合唱コンクールの指揮を担当した時、最初、自分の意見を押しつけ過ぎていた。しかし、佐渡さんの指導法を参考に、歌う人の意見を聞きながら練習し始めると、クラス一丸となり、予想以上の結果が出せた。私はこの本で自分を大きく変えることができた。難しい本ではないので多くの人に是非読んでもらいたい。

# 瀬谷ルミ子著『職業は武装解除』

おおはら あおい

宮崎南高等学校 1年 大原 葵 さん

この本は、著者の瀬谷ルミ子さんが「武装解除」という職業に就くまでの体験談です。武装解除とは、内戦や紛争、揉め事が終結したら国民が持っている大量の武器を回収し、職業訓練を施して平和へ導くものです。瀬谷さんは高校生の時に目にしたルワンダ大虐殺の写真から大きなショックを受けました。その後、紛争解決に携わることを目標にしました。初めてルワンダを訪れ自分の無力さを痛感してからは「自分に出来ることをする」姿勢でNPOやNGOなどで経験を積んでいきました。今では世界でも数少ない武装解除のプロフェッショナルとなりました。

瀬谷さんの一度やると決めたことは徹底的に実行していく姿がとてもカッコいいなと思いました。また、世界中を飛び回りいろんな兵士を社会に戻していく所に感動しました。自分の人生を切り開くのは自分自身なのだなと改めて感じました。

# 吉本ばなな著『キッチン』

おおさき りさ

延岡高等学校 1年 大崎 理紗 さん

「私がこの世で一番好きな場所は台所だと思う。」これは、主人公のみかげという女性の冒頭の言葉だ。私は、キッチン、台所…？どういうことを意味しているのか疑問に思った。みかげが亡き祖母と住んでいた家の台所。祖母の亡き後みかげを引き取って一緒に暮らしてくれた亡きえり子さん（本当は男）と息子雄一の家の台所。その二つの家族のあった場所でくり広げられるみかげ、そして雄一の葛藤。薄暗く闇に包まれた二人の心に重く重くのしかかる大切な人の死に対する心の描写は痛いほど伝わってくる。リアルな二人の心情の変化は私にせつなく語りかけてくるものがあった。身近にあるが非現実的に感じてしまう死に対する孤独感と虚無感に小さな光を示してくれるような冷たく温かい世界観が私の生き様を考えさせてくれた。そして、キッチンという馴染みの居場所に新しい視点を与え、人間の心の奥底にあるものをのぞきみれるところに魅力を感じるはずだ。

(以上、原文のまま掲載)

## 「私のすすめるこの一冊～高校生の声～」応募状況

学校区分	応募学校数	応募者数
県立高等学校・中等教育学校	18校	502名
私立高等学校	5校	61名
特別支援学校	2校	2名
計	25校	565名



ご紹介した10冊の本は、すべて県立図書館で借りることができます。  
県立図書館の本を借りるには、利用登録が必要です。この機会に、利用登録しませんか！